

Ⅰ 章

塩竈市の現状と課題

1. 塩竈市の現状
2. 都市基盤の課題



1. 塩竈市の現状

1) 人口減少・少子高齢化の進行

- 平成7年以降、人口が減少しており、少子高齢化が進行しています。将来的にも人口減少・少子高齢化が急激に進行する見通しです。
- 人口動態としては、平成13年以降自然減少が進行しています。社会増減も減少傾向が続いていますが、近年は微増しています。
- 市町村間の転入・転出状況は、仙台市、多賀城市、利府町への転出超過が見られ、県東部・北部からの転入超過が見られます。
- 新しい住宅団地の高齢化率は低くなっていますが、中心部等の高齢化率は高くなっています。
- 人口集中地区は、平成7年以降大きな変化はありませんが、人口集中地区における人口密度は減少傾向にあります。
- 空き家率については長期的に上昇傾向にあり、平成5年から平成20年を見ると約9%から約14%に上昇していますが、平成25年は震災の影響により9%まで減少しています。

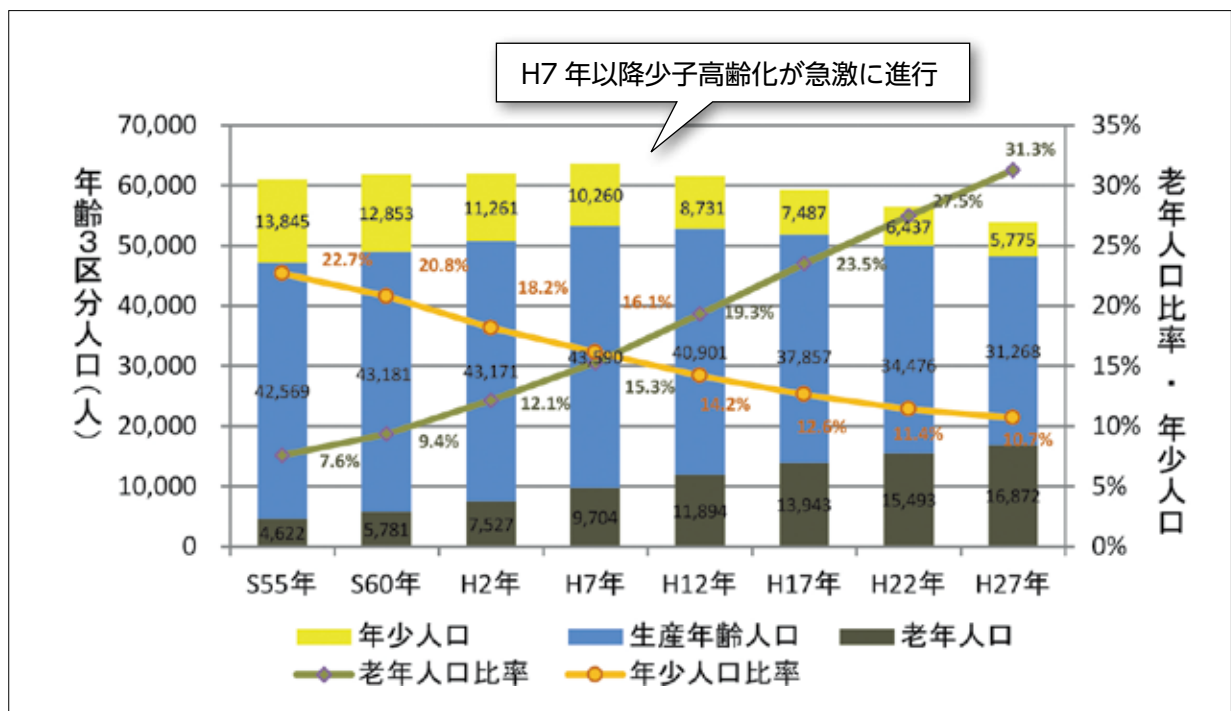


図 年齢3区分別人口の推移

資料：国勢調査

2) 徒歩圏内の生活サービスの充足

- 日常生活サービス（医療施設、福祉施設、商業施設、公共交通）を徒歩圏で享受できる市民の割合は、仙塩地域の中で仙台市に次いで高くなっています。ただし、歩いて暮らすためには地形的な制約があります。
- 鉄道・バスからなる公共交通網は概ね全市をカバーしている上に、仙塩地域の中では人口に対して効率の良い公共交通網となっています。
- 福祉施設については、ほぼ全ての高齢者に対応した配置となっており、福祉サービスが充足しています。
- 保育所については、大半の子育て世帯の徒歩圏に対応した配置となっており、保育サービスが充足しています。

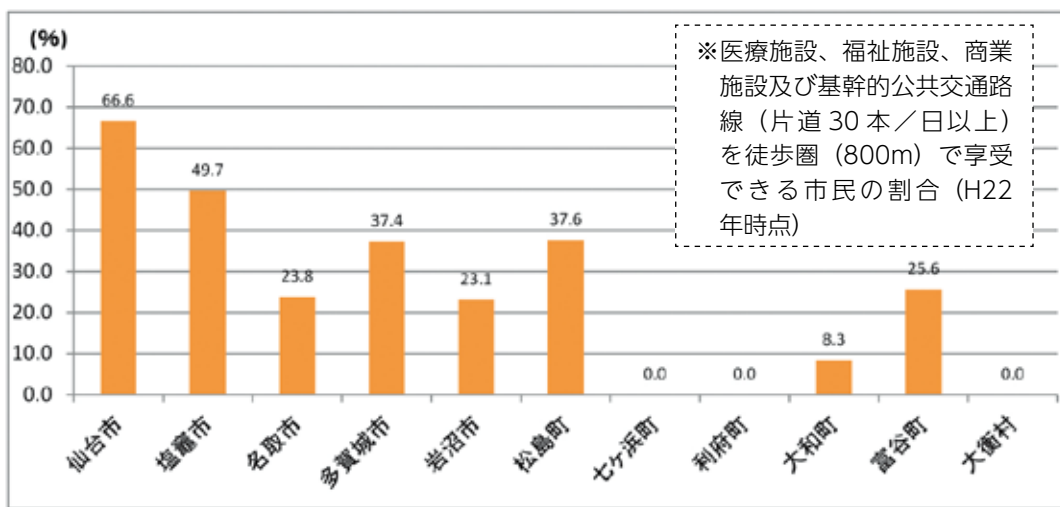


図 日常生活サービスの徒歩圏充足率



図 日常生活サービスの徒歩圏

資料：国土数値情報等

3) 商業・観光活動

- 市内の店舗数、従業員数は減少傾向にあります。
- 小売業の年間販売額は減少傾向にあります。特に仙塩地域の中では低い水準となっており、商業機能の集積は比較的低くなっています。
- 観光客入込数は概ね 200 万人台で推移しています。東日本大震災後は一時 200 万人を下回りましたが、平成 25 年以降は震災前の水準まで回復しています。

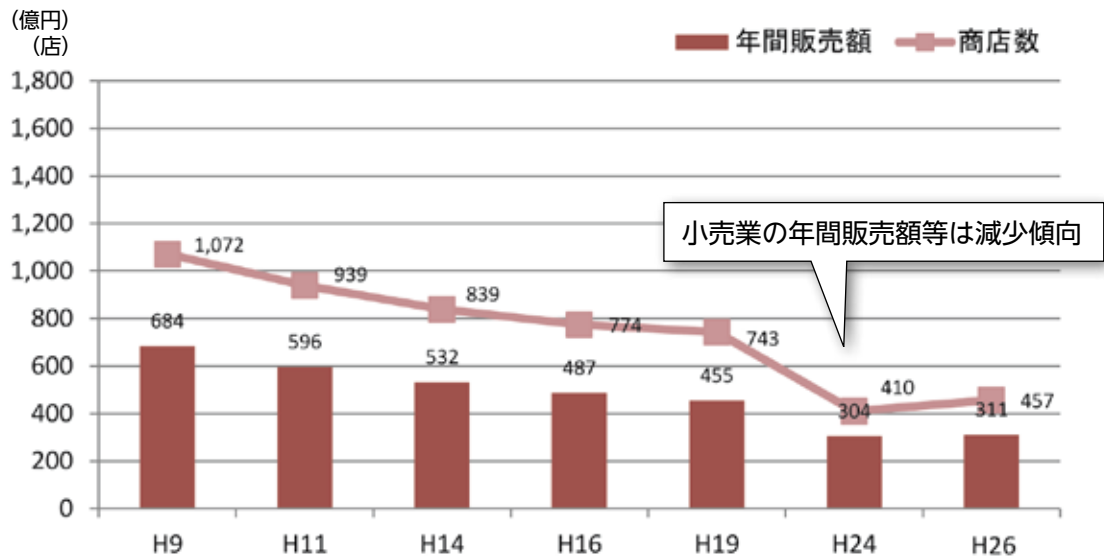


図 年間販売額、店舗数の推移 (小売業)

資料：経済センサス
(H19 以前は商業統計調査)

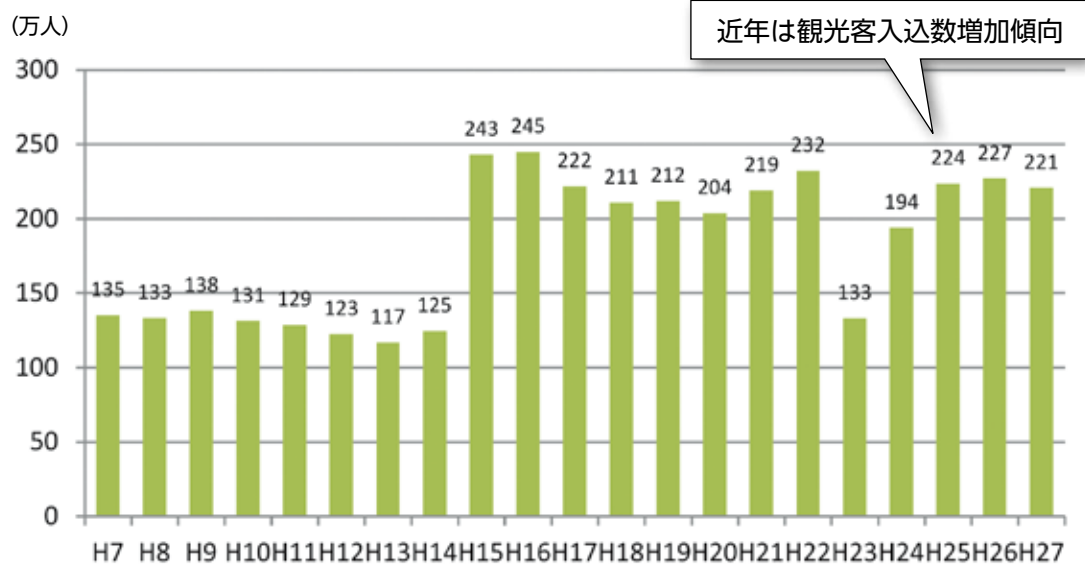


図 観光客入込数の推移

資料：宮城県観光統計概要
(H15 年以降マリンゲート塩釜が集計に追加)

4) 物流・製造活動

- 卸売業の年間販売額、製造品出荷額等は震災の影響のため大きく落ち込みました。その後年間販売額等は増加していますが、長期的に見ると減少傾向にあります。
- 人口当たりの事業所数は仙塩地域の中では比較的多くなっていますが、事業所規模は小さくなっており、小規模事業所が比較的多く立地しています。
- 沖合及び沿岸においても水産物の資源量が低水準にあることなどから、魚市場の水揚げ量が減少しています。

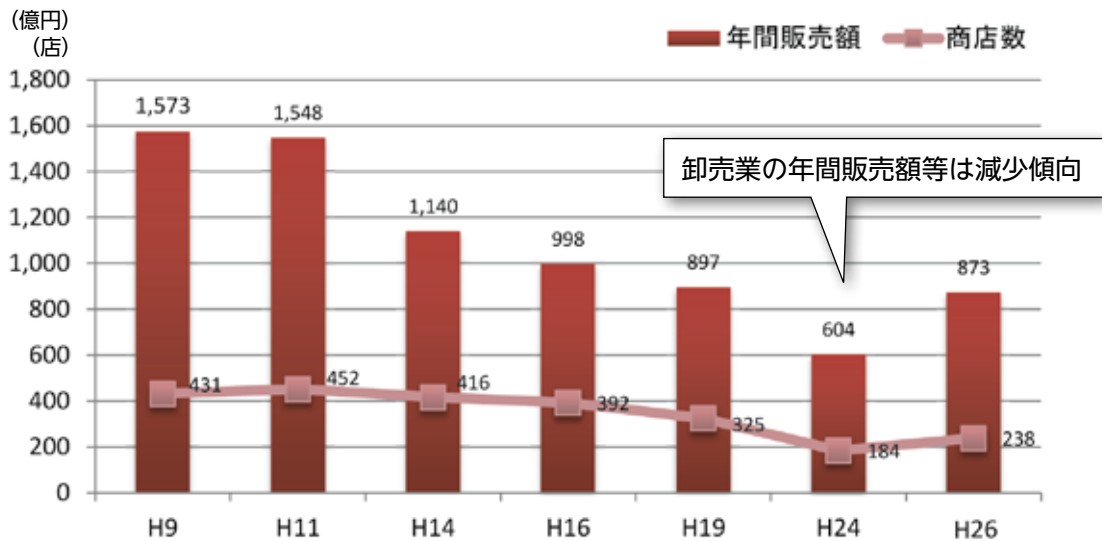


図 年間販売額、商店数の推移 (卸売業)

資料：経済センサス
(H19以前は商業統計調査)



図 製造品出荷額等、事業所数の推移

資料：工業統計調査

5) 歴史的・文化的な価値

- 歴史・文化要素としては、遺跡・遺構、銘石・碑、歴史的建築物、岩蔵、寺院、神社、古道など様々な種類があり、貴重な価値を有しています。
- 歴史・文化要素は市内各所にあり、特に中心部には旧ゑびや旅館や旧亀井邸等の歴史的建築物、鹽竈神社等の神社・寺社等が集中しています。また、西部には、古道が広範囲に広がっています。浦戸諸島には、銘石・碑や神社、寺院が数多くあります。

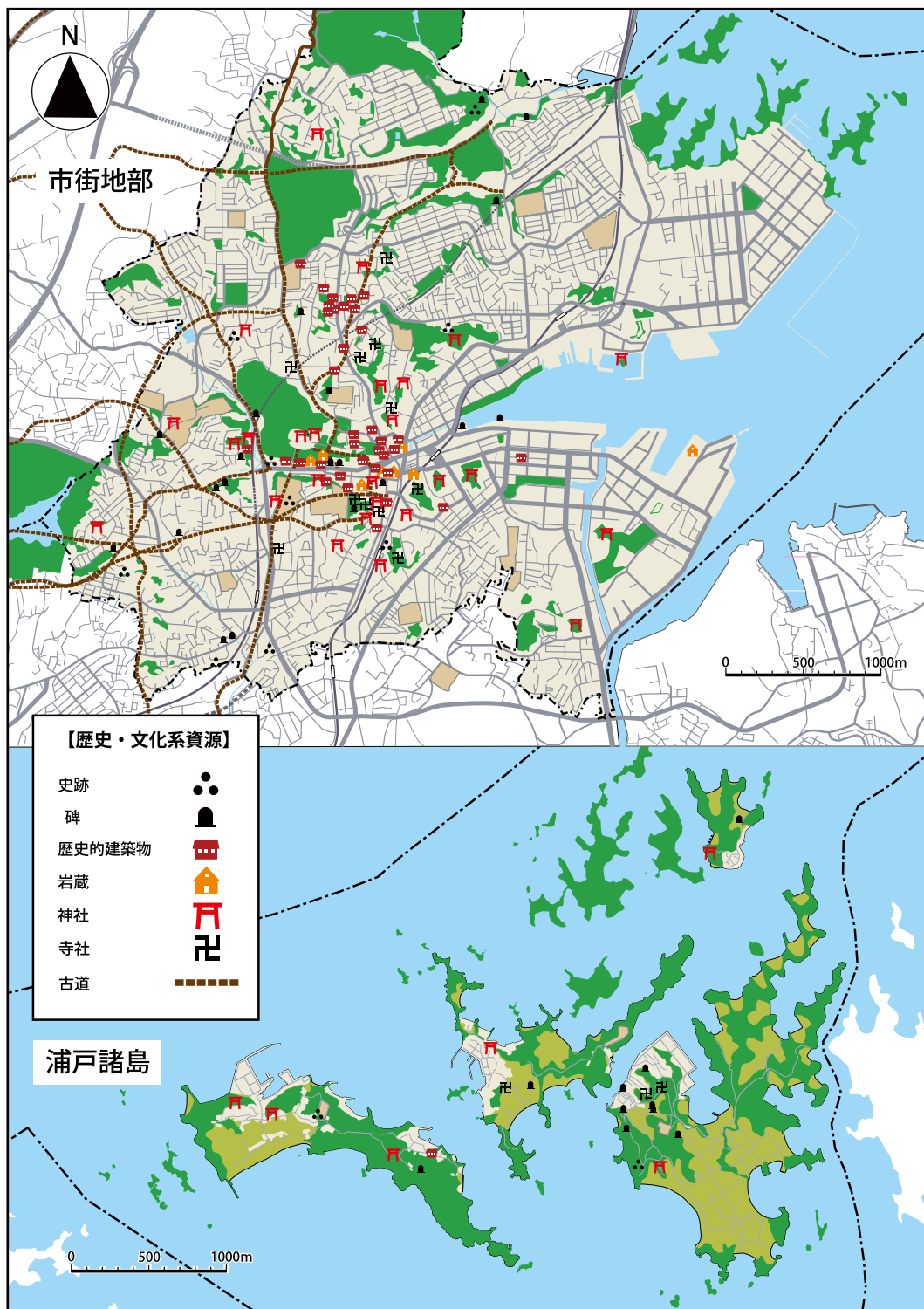


図 歴史・文化系資源の分布

出典：塩竈市景観計画（平成 28 年 4 月）

6) 豊かな自然環境

- 緑地空間については、小規模な緑地や斜面林に加えて、大規模な緑地として一森山や伊保石公園、ゴルフ場、浦戸諸島等の緑地があります。
- 水辺空間については、貞山運河や野田の玉川、石田川、加瀬沼、新町川等があります。また、市街地の東側には千賀の浦が広がり、杉ノ入裏地区には溺谷地形の原風景が残され、さらに浦戸諸島まで複雑な海岸地形が続いています。

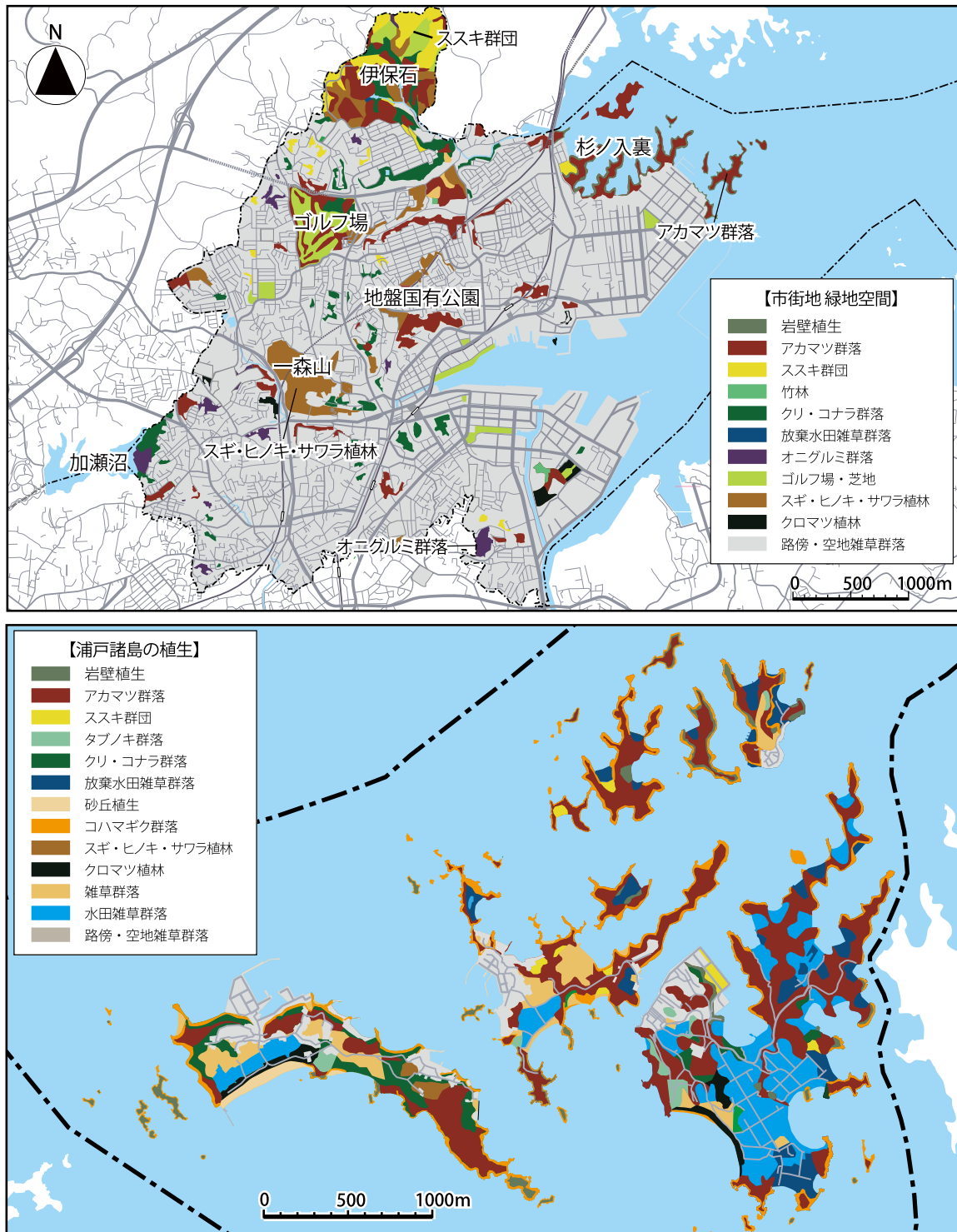


図 植生の分布

出典：塩竈市景観計画（平成 28 年 4 月）

資料：第 6 回、7 回自然環境保全基礎調査 環境省（平成 13 年）

7) 都市基盤整備の進捗

- 都市計画道路については、主要な路線は概ね改良済又は概成済となっていますが、周辺市町との接続部分においては未整備区間が見られます。
- 都市計画公園は、伊保石公園で一部未供用部分が見られますが、街区公園、近隣公園は概ね供用済みとなっています。なお、公園の誘致圏に入っていない市街地も見られます。
- 下水道（汚水）は、市街地の大部分で供用済となっています。

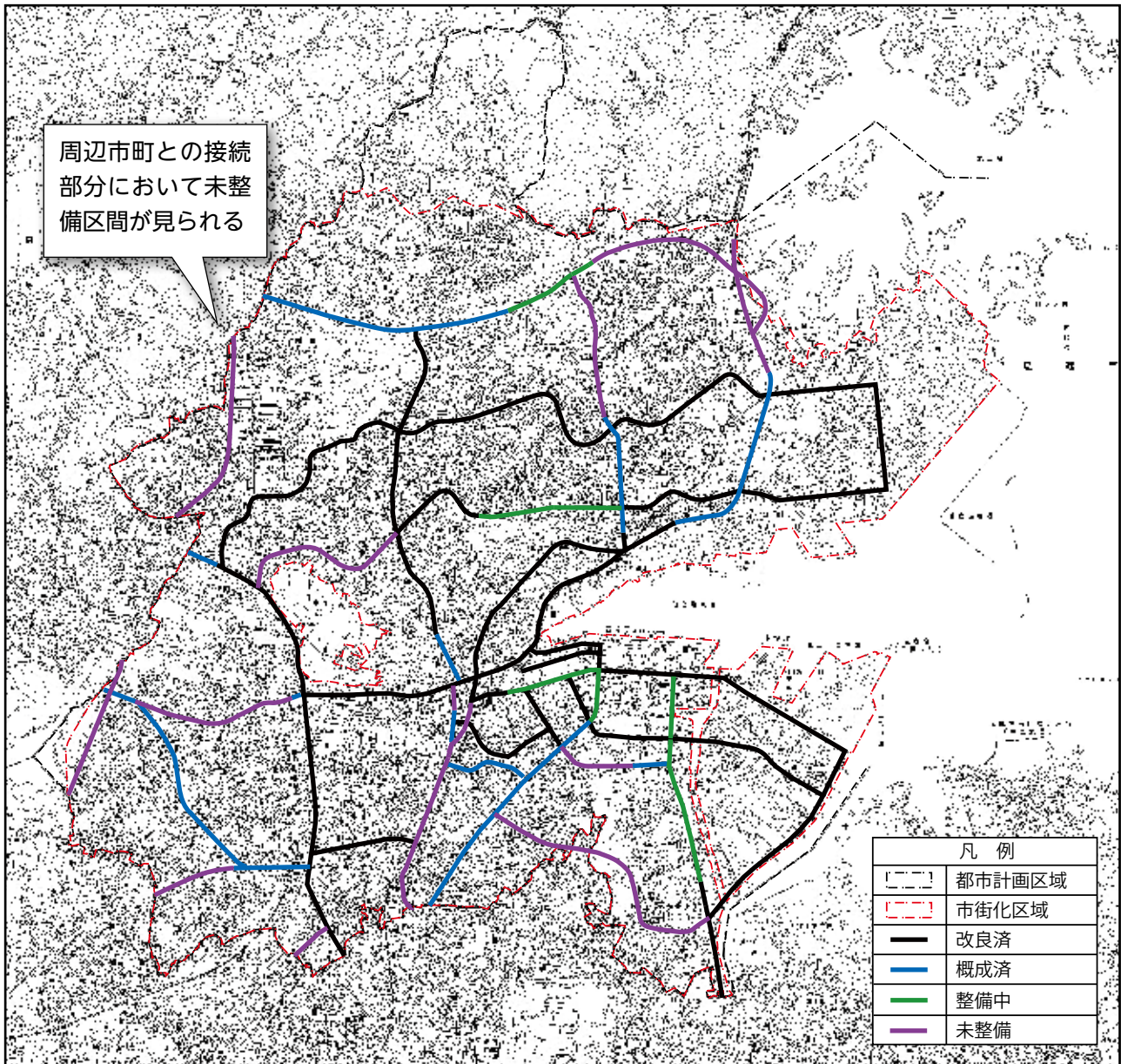


図 都市計画道路整備状況

8) 市民との協働の推進

- 平成27年に実施した市民アンケートによると、目指すまちのイメージは「安心して子どもを産み育てられる支援の充実したまち」が最も多く、次いで「歴史や港町としての魅力を売りにした、多くの人を訪れる観光のまち」となっています。
- 今後のまちづくりのキーワードは「観光」と「住みよさ」が多く挙げられ、「食」、「港」、「海」、「にぎわい」、「安全・安心」などが続いています。

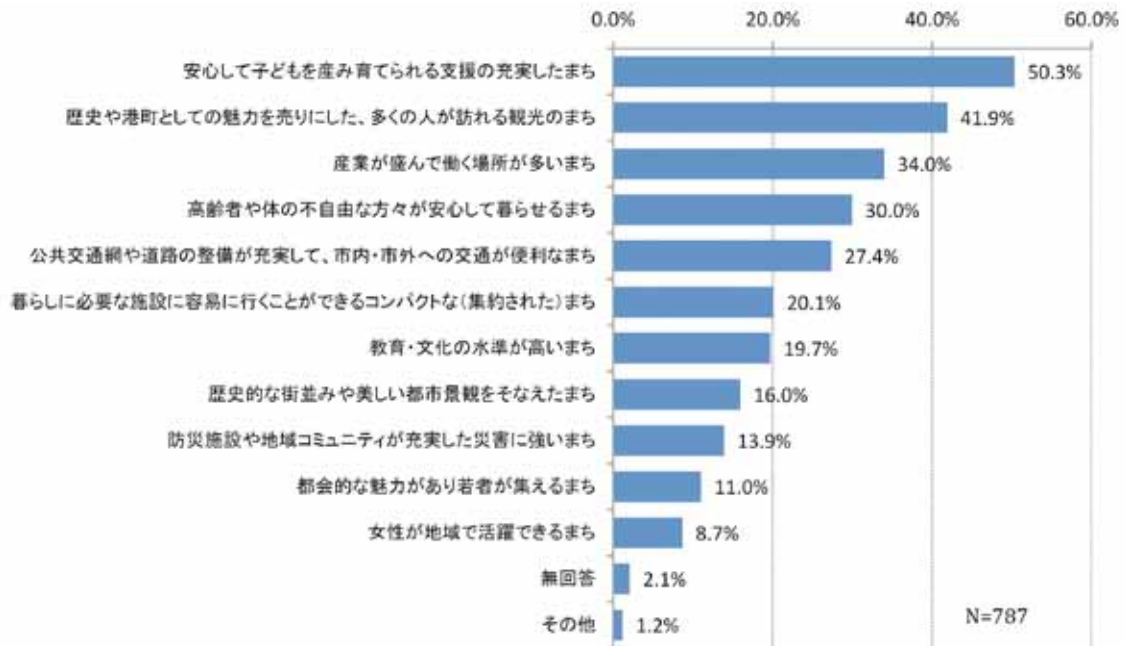


図 目指すべきまちのイメージ

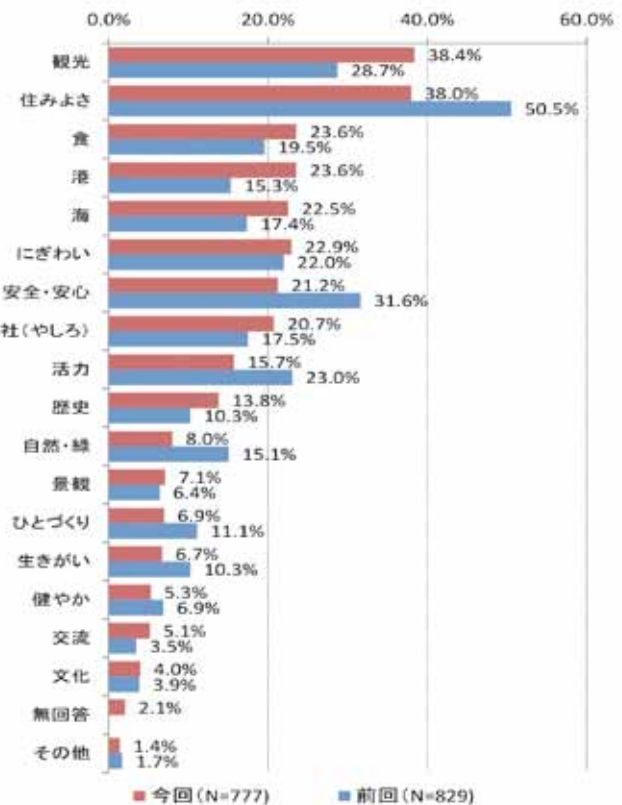


図 まちづくりのキーワード

出典：市民アンケート調査（平成27年4月）

2. 都市基盤の課題

1) 暮らし続けられる環境の確保

本市は少子高齢化が進行しており、特に市中心部は高い高齢化率となっています。この傾向は今後も続く見通しとなっており、少子高齢化が進む中でも、誰もが生涯を通して健康に暮らし続けられるまちづくりが求められます。

また、本市は社会減と自然減を背景として、平成7年をピークに人口が減少傾向にあります。

将来的に本市の人口を安定させる定住・移住を促進するためには、充実した公共交通網や福祉サービス、保育サービスを活用し、市民が求める医療・福祉・商業等の生活サービスの一層の向上が求められます。



散歩中の保育園児

2) 産業の活性化

港湾や漁港、魚市場を有する本市は、水産業を基幹産業として発展してきましたが、その水揚げ量は減少傾向にあり、さらに東日本大震災によりその機能が低下しました。そのため、本市の活力の再生にあたっては、基幹産業である水産業・水産加工業等の活性化が求められます。

商業・観光面においても東日本大震災の影響を受けており、観光客入込数については震災前の水準まで回復していますが、商業の年間販売額はまだ回復途上にあります。本市の活力を支える商業の再生・発展に向け、中心部の未利用地活用や観光産業の活性化等が求められます。



塩釜水産物仲卸市場

3) 「塩竈らしさ」の価値の向上

本市は、市中心部の鹽竈神社、町屋建築、市西部の古道、浦戸諸島の熊野神社や数々の石碑など、歴史的に貴重な遺跡・遺構、建造物等を有しており、歴史と趣が感じられる「塩竈らしさ」を形成しています。さらに、貞山運河や加瀬沼などの水辺空間、伊保石公園や浦戸諸島などの緑の空間が市街地に憩いと魅力を与えています。この「塩竈らしさ」を次代に継承するため、本市特有の歴史・文化要素や豊かな自然環境の価値を一層高めることが求められます。

また、本市の魅力向上に向けては、このような地域の資源を最大限に活用し、「塩竈らしさ」を磨いていくことが求められます。



旧亀井邸

4) 生活快適性の向上

本市は、古くから市街地を形成しているとともに、丘陵に囲まれた地形であるため、道路や公園等の基盤整備に労力を要してきましたが、道路については都市計画決定した規格での整備が達成されていません。このような状況を踏まえ、周辺との連携強化に向けて、交通体系等の広域的なネットワークの充実が求められます。

さらに、将来的な財政のひっ迫を見据えると、現在の都市基盤の維持と機能向上を図りながら、効率的な維持管理に向けて公共施設の集約化を図っていくことが求められます。



整備中の八幡築港線

5) 安心・安全な基盤整備

本市は東日本大震災による人的・物的な被害を受け、震災復興を推進してきました。復興事業による基盤整備は進捗していますが、生活を支え、地域経済を活性化する生業については復興途上にあるため、復興事業の早期完了が求められます。

また、市民が安心・安全な生活を送るためには、自然災害に対する防災力や犯罪に対する防犯力の向上が必要となるため、沿岸部の冠水対策、急傾斜地の安全確保、狭あい道路の解消、バリアフリー化への対応、防犯灯の設置等が求められます。



津波避難デッキ

6) 市民力・行政力の強化

市民の価値観が多様化する昨今、行政だけが主体となるまちづくりでは限界があるとともに、市民の満足度の高い地域を創造することは困難になっています。このことから、行政力の強化とともに市民協働の仕組みづくり等を通じた市民力強化により、市民と行政が一体となった地域経営に取り組むことが求められます。

さらに、まちづくりの担い手の育成や民間活力の活用、市民団体間の連携強化など、多様な主体によるまちづくりの促進も求められます。



塩竈の未来のまちづくりを考える会

コラム『塩竈の都市計画』

れいめい

①黎明期 1935～1960

大正8年（1919）の都市計画法（旧法）制定から16年後、町制時代であった昭和10年（1935）に塩竈都市計画区域（1,841ha）が制定されました。

昭和2年に発生した本町大火の災害復興として本町土地区画整理事業が昭和15年（1940）頃まで行われ、通りの拡幅と第一小学校への通学路が整備されました。

大戦末期の昭和19年（1944）、軍事物資の輸送や防災対策として10路線が計画決定されましたが、昭和20年（1945）、東北で二番始めに空襲を受け、本町から旭町にかけての576戸が焼失しました。

敗戦後の昭和22年（1947）、戦災復興土地区画整理事業の決定とともに都市計画道路も全面的に改定され、復興が開始されました。

まず、昭和28年～33年（1953～1958）、玉川土地区画整理事業が行われ、戦時中に敷設された東北本線（海線）の駅として塩釜駅が昭和31年（1956）に整備されました。

また、昭和35年（1960）、チリ地震津波により大きな被害のあった北浜地区において、都市改造と称して北浜第一土地区画整理事業が、30年近い年月（1962～1989）を費やして行われました。



工場や住宅が密集していた北浜地区(昭和30年代前半)



現在 土地区画整理事業により一変したまちなみ